四山指導部ソフト球大会開催

エラーの妹はげます兄

ドロまみれの姿の美しさ

八月二十日、ぢりぢりと焼きつくような炎天下。児童対策の一環として、四山指導部主催による少年ソフトボール大会が、三井アルミのグラウンドで行なわれました。

各地域分会から集った小学生約三十人に、応援の組合員・主婦会員を入れ午前九時試合開始。

小学生チーム同志の試合が終ると、こんどは組合員対小学男子、主婦会員対小学女子という形もとり入れて、なごやかななかにも真剣さあふれ、青空のもと白球を追う子どもたちのひたむきなまなざしが、とても印象的でした。

ともすれば勝敗だけにこだわり勝ちな風潮のなかで、相対する小学一年生の女の子に、バットの握り方からふり方まで手をとって教えている男の子のほほえましい姿。家族ぐるみの、三池の闘いの縮図を見ているようでした。

この大会のために、三里校区連協と大島地域分会は合同で、八月の七日から練習を続けてきましたが、諸会議の合い間を縫いながら昇坑のあとでコーチにあたる組合員の労苦は、大変なものでした。でも、コーチにあたった酒本忠義さんはいっています。

「子どもたちと一緒に、汗やドロにまみれながらやってきたことは、とかく親子の断絶がいわれるなかで、子どもを正しく育てるうえで大きなプラスになった」

丹念に大会の記録写真を撮り続けた待鳥英勝さん（大島地域分会）も、話していました。

「ファインダーからのぞく子どもや母ちゃんたちのいきいきとした姿は、本当に素晴らしかった。特にエラーをした自分の妹の肩をたたいて勇気づける、兄の姿を見たときは、感動のあまりファインダーが曇ってしまって、とうとうシャッターを押すことができなかった」

大会が終り、肩をたたき合いながら去った子どもたちの、ドロによごれたユニホームの後ろ姿の美しかったこと。たとえ、三池新労・三池職組のソフトボール大会のように、立派なユニホームや豪華な賞品はなくとも、すすり合う一パイずつの氷水のなかに、真に人間連帯を求める心が通い合うところを見る思いでした。そんな思いをかみしめながら後にするその日のグラウンドが、妙に名残惜しくてなりませんでした」

（記事は片山末吉さんで、写真は待鳥英勝さんです）

ダブダブのユニホーム姿の、何というあどけなさ。

原水禁長崎大会に参加して

四山指導部　飯田誠子

「ノーモア・長崎」と大書したニュースカーを先頭に、バス三台に分乗した私たち百五十人は、熊本県代表として被爆三十三年原水爆禁止長崎大会に参加しました。

八月七日十六時四十分長崎の農協会館に着き、大会参加への全員の意志統一を行ないました。

翌八日は、私は立派な公会堂で行なわれた分散会（第一）に参加しました。北海道から沖縄まで、駈けつけた全国の仲間が会場を一杯に埋めていました。

二度と戦争許すまい

守ろう、お腹を痛めた子たちを

分散会では核の廃絶、核被害、平和教育、被爆者援護などについて話し合いました。

――一円と五円の小銭硬貨拠出で大会参加の資金づくりをすると運動と、無公害石鹸販売の利益金で平和教育をすすめられる日教組主婦）

――広島大会に参加して、長崎にきた。自分のお腹を痛めた子どもを、二度と戦争に出さないように、と訴えている。（北海道のお母さん）

ともに、折りづるを子どもと折りながら戦争と平和の話をし、二度と戦争をくり返さないよう語りつづけている。（大分バス労組の一の先生方に対し、〝はだしのケン〟（映画）の上映を中止させようとしたり、ある学校の校長など、放送施設の使用禁止をたくらんできたのを、教師全員で排除したりして、平和教育放送を実現したことなども発表がありましたが、私たちは母と女教師の会などを通じ、連帯の強化の必要を感ぜずにはいられませんでした。

三日目は、大橋町公民館前の慰霊碑に参り、原爆二世の人の話を聞き、改めて原爆の恐ろしさを思い起こし、二度と戦争を許さない決意をこめながら〝原爆許すまじ〟を全員で合唱、犠牲者の冥福を祈りました。

いかなる国の核実験にも反対し、平和と被爆者援護法制定のために頑張らなければならないと思いました。

地域を越え一緒に

荒尾二小校区は地びき網

荒尾地評二小校区協議会（田上げるゾ」「そこの赤シャツ、網の実会長）は、荒尾地評、三池労下を押さえんか」、と船頭さんの組、白鳩診療所、日本社会党荒尾叱声が飛びました。

総支部の協力を得て、八月六日午後一時より旧荒尾海水浴場付近の海で地曳き網漁を行いました。

午後一時より二隻の漁船に乗り（船に酔う人は徒歩で）漁場へ。漁場に着いてからは網を入れるまでの間、潮のなか足探りで赤貝やキャッポ、三郎貝などをさがしあてては歓声をあげました。

網は、ひき潮のとき一回と、満潮のとき一回、計二回曳くのですが、網の両端が洲に着くと大人も子どもも力を合せて「ヨイショ、ヨイショ」と網を曳きました。

洲にひき寄せられる網の輪がせまくなるにつれ、網の中でボラなどが逃げまどい、「コラッ、網をもう少し下げんか。下から魚が逃げるゾ」「そこの赤シャツ、網の下を押さえんか」、と船頭さんの叱声が飛びました。

やがて六十センチもあるアカメや、カレイ、クチゾコなどの山ができていき、みんなはこの日疲れをしばし忘れてしまいました。

帰り道、「きつかったな」「でも魚がたくさんとれてよかったたい」「何より大人も子どもも、単産や居住地区の違いを越えて取り組んだことがよかった」「来年はもっと多くの仲間を結集してやらんなんばい」、と喜びの声があふれていました。

（四山指導部・百田悟さんの記事。文中一部割愛したところがあります。悪しからず。なお、写真は同指導部の待鳥英勝さんです）

「よいしよ、よいしよ」と地びき網

ながつき　九月の暦

1日　二百十日、防災の日（関東大震災記念日）。
4日　三井三池炭鉱の万田鉱で暴動が発生、軍隊出動。（一九一八年＝大正七年）
11日　二百二十日。
13日　世界法の日。
15日　敬老の日。
17日　十五夜。仲秋の名月。
20日　彼岸入り。動物愛護週間。
23日　秋分の日。三池炭鉱は特定休日。
24日　結核予防週間。
26日　彼岸明け。

×

九月の天気は残暑が尾をひき、西日本では依然として雨は少い模様。

でも九月は台風シーズン。家のまわりの点検をお忘れなく。

夏の見日記

息子を送って

本所指導部　中原千春

風立ち始めた、八月末のある朝のこと。学校が休みで帰省していた息子が東京の下宿へ帰っていった。

Tシャツにボストンバックが一つ、という軽装。部屋を借りて自炊している息子の不自由さを思っては、何かと持たせたがる私だったが、「梅干しだけは家で漬けたのでないと……」というわけで、ほかのものは皆ことわられた。私もムダとわかる抵抗はやめにして、あっさりひきさがることにした。

この四月、生れて初めて親もとを離れて生活することになった息子を送り出した時までは、こうではなかった。やれタオルだ、やれ石けんだ、やれおやつの豆菓子だ、というので、あちらで買えばいくらでもあるはずの品ものでも、バッグにぎゅうぎゅうつめてやったものだった。

その時はまた、しばらく会えないと思うと涙ぐみそうになり息子にいってやるべきことも、考えているうちにいえずじまいになってしまった。それでは後で私はみんなが寝静まったある日の夜ふけ、人生訓ならぬ私の老婆心を手紙に書いたのだった。

一つ、暇な時は読書をする習慣をつけること。
一つ、浪人中の友達は時どき会ってはげましてやること。
一つ、まわりの人を大切にすること。
一つ、フトンはなるべく干した。

部屋のなかは常に片づけて快適に暮らすこと。

そのほか、摂るべき栄養食品についてなどなど。

今でこそ一メートル七〇を越える背丈となり、病気の心配などしなくてすむようになったものの、小学校から中学校に進む頃は、思えばぜんそくの発作でどんなに苦しんだことだったろう。ぜいぜいあえぐ子どもの傍らにいて、朝までまんじりともしなかった夜もたびたびだった。主人が会社をやめて、公害の街の大牟田からどこかへ転住することを、夫婦で真剣に語り合うこともあったほどである。

でも、今たくましい体に育ってくれた息子を見ていると、親の願いは発展する。とくに、本だけはたくさん読んでくれるように、と。読書を通して、さまざまな人間の生き方、考え方を知り、心豊かな人間になってくれること。悩みや迷いのなかで自分が歩むべき真実の人生を模索し、奥ゆきのある人間になってくれること。たとえ歩みはのろくとも、正しい方向をちゃんと見定めながら歩いていくこと。いろんな思いをこめて送り出した私だったが、ふと、これからはつくろいものもしなければならない息子のことが心に浮かび、針と糸を持たせることを忘れたことが悔まれてならないのである。

やっぱり私は、間抜けな母親のようだ。